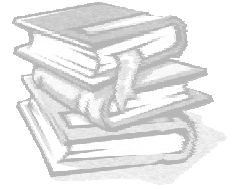




# イギリス科ニューズレター No. 10 April 2005



東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス地域文化研究分科  
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 317)  
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)  
E-mail: [british@ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:british@ask.c.u-tokyo.ac.jp)  
Homepage: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp/>

## 主任挨拶

### 中尾まさみ

この春は、イギリス科にとって大きな出来事がいくつもありました。まず2月には、木畑洋一教授が大学院総合文化研究科長・教養学部長に就任されました。駒場の研究・教育の中核とも言うべき重要なポストに私たちの敬愛する木畑先生が就かれたことは、誇らしく、また駒場全体のためにも喜ばしいことであります。

3月はじめには、新研究棟(18号館)への研究室の移転が行われました(イギリス科研究室は従来のみま8号館)。教員の多くが引越作業に追われる頃、超域文化科学専攻大澤吉博教授の突然の訃報が飛び込んできました。比較文学比較文化研究室、英語部会の重要なメンバーであられたのみならず、教務委員長など数々の重責を果たされた大澤先生はいつもエネルギッシュで、あまりに急なお別れに私たち同僚や学生は、言葉を失いました。イギリス科のご出身で、助手も務められた先生とお親しかった卒業生の方も多いと思います。謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

さて、'93年よりイギリス科のためにご尽力下さった草光俊雄教授が、3月末日をもって退職され、放送大学教授に就任されました。多くの学生の指導に当たられ、主任としても分科の運営にはかり知れない力を発揮なさった草光先生が去られることは、さびしい限りですが、先生の永年の貢献に深く感謝し、今後のご活躍とご健康を心よりお祈りいたします。草光先生の後任には、神戸大学から西川

杉子助教授が着任されました。近世イングランド史がご専門です。次号で、詳しくご紹介いたします。

## イギリス科の思い出

### 草光俊雄

まだ慶應義塾の院生だった頃、東大の駒場にはイギリス研究の学科があり、文学のみならずイギリスの歴史や政治、経済や思想などが総合的に学べるらしい、将来そういうところで教えることができたら素晴らしいな、と友人たちと話し合ったことを思い出します。そしてそれから20年ほどして、あこがれていた駒場に着任し、イギリス科の教育が私の仕事の中心になりました。その頃は出淵博先生がイギリス科の主任をされ、学習院から河合秀和先生がイギリスの政治を担当されていました。出淵先生の前主任だった山内久明先生は評議員をされていて、木畑さんは英語教室の主任でした。駒場の部局化という大騒動の真っ最中でした。

4月に新3年生の歓迎コンパが生協の薄暗い食堂で行われ、なんだか気が滅入ったことを思い出します。こんなところで文化は生まれれないと思い、その年の秋の内定生歓迎会は主任と相談し、手作りの、ワインやチーズなどを中心とした、今の形に改めました。このスタイルのパーティはすぐ他の分科や専攻にもひろがりましたので、東大のパーティを変えたのは私だと自負しています。

着任して2年目が3年目の秋に、丹治愛君と助手の大矢玲子さんと三人でイギリス科主催のイギリス旅行をしたのも楽しい思い出です。

イギリスの産業遺産や文化遺産を廻る、とテーマを決めて、私のイギリスでの多くの友人たちを動員して、博物館や美術館、大学の数々を訪問し、そこでレクチャーを受けたり、珍しい博物館を訪ねたりしました。地方にも出かけ、バス旅行が大半でしたが、一人のけが人も出ず、無事に成田に着いたときは肩の荷が下りました。当時ロンドンで勉強していた菅靖子さんが途中参加してくれたり、自由行動の日に、ロンドン郊外のウィリアム・モリスゆかりのレッド・ハウスを訪れたり、色々思い出はありますが、ストラットフォードでシェイクスピアの芝居を見た晩、最後の幕の前に終わったのだと勘違いをしてホテルに帰ってしまった学生たち(もちろんイギリス科の学生ではなかった)がいたのには笑ってしまいました。今、教務嘱託をしている藤田君もその時の参加者でした。

出淵先生の後には、木畑さん、成田さん、塚本さんと主任は替わり、その後私が2年間、学外出身者ではありましたが、主任を務めました。卒論中間報告会での一泊の合宿を始めたのは私の主任の時でしたが、みんなで旅行して、温泉にでも入って親睦を深めるというのは、私の学生時代のゼミ合宿を想起してのものでした。指導教授の遊部先生と乗鞍高原の民宿に泊まり、勉強をみっちりやった後に、コンパをして夜を徹して飲んで、語り明かしたことが、私の学生時代の貴重な思い出だったことによる思いつきでした。

出淵先生は退官されて成蹊大学に移られて間もなく病を得て亡く

なりましたが、辛く哀しい思いをしました。その他にも、イギリス科で教えていただいた先生のなかで、鬼塚先生、杉浦先生（共にイギリスの経済）、そしてイギリスの言語担当の山縣先生も亡くなられてしまいました。10年という歳月が重く思われるのはこうしたことを考えるときです。また私の友人たちの多くに非常勤で来ていただきました。川勝平太、富山太佳夫、湯沢威、見市雅俊、中野晃一、市橋秀夫、井野瀬久美恵、西沢保、等々、学生たちにインパクトを与えてくれたと思います。

イギリス科の部屋は、ちょうど私の研究室の目の前だったので、主（ぬし）のようにいつも居座っていたような気がします。コーヒーを飲みながら（インスタントから本物のコーヒーに変えたのも私でした。10年間コーヒー豆を提供し続け、やめた今も豆を寄付しています）学生たちと雑談するのが何よりの楽しみでしたが（学生にとっては文字通り煙たい存在だったのではないかと思います）、放送大学にはそうした喜びが無くなるのが寂しい限りだと思っている次第です。

これからのイギリス科の発展を願っています。

シリーズ イギリス科教員の語るイギリス  
第二回

## 「庭の中の作家」展を見て 安西信一

先日ロンドンで見た一展覧会を通して、葦の髄からイギリスを瞥見してみよう。大英図書館で開催された The Writer in the Garden という展覧会である（会期は昨年11月から本年4月）。庭について書かれた同館収蔵の手稿や書物を、中世から現代まで陳列しただけの地味なものだが、大盛況で、ロイ・ストロング卿を初めとする豪華メ

ンバーによる数々の講演会のチケットも全て完売していた。

ほの暗い展示室に並んでいるのは、中世の写本を除くと、ほぼ全て「イギリス人」と呼んでよい人たちの書き物である。個人的には、17世紀イギリスの最も重要な庭園文献ともいうべき、イーヴリンの *Elysium Britannicum*（未刊）の手稿を見たのが感激だった。その他、中世の『薔薇物語』の挿絵に始まり、ミルトンは勿論、ベーコン、マーズ、ポープ、トムソン、シェンストン、ジョンソンを経て、コールリッジ、キーツ、テニスン、ディケンズ、『秘密の花園』のバーネットから、果てはラーキンまで。イギリスの主要な書き手のほとんどが、庭について一家言をもっていたとの感を強くする（実際「庭いじり」に手を染めた作家も少なくない）。

こうして並べられると、ヨーロッパの庭がエデンの園の再現だったという伝統もすんなり頭に入る。またイギリスの庭園文献が、一つの「言説編制」とすら呼べる膠着力を備えた野太い流れであることも納得されてくる。何よりイギリス人が、これほどまでに庭に憑かれ、庭について無数の言辞を連ねてきたという、そのオブセッションに改めて圧倒された。そもそも王家からして庭好きの伝統があり、近年ではチャールズのオーガニック・ガーデニングに辟易している向きも多いだろう。「詩的熱狂」（*furor poeticus*）をもじった言葉を用いれば、イギリスはまさに、「庭狂い」（*furor hortensis*）の国なのであった。

理由は様々に考えられるが、一つには、イギリス自体が一個の庭として表象されたことがある。イギリスは「全世界から截断された」（ウェルギリウス『牧歌』）、海に囲まれた楽園である。そうしたクリシエはきわめて古く、シェイクスピアも幾度か繰り返してい

る。それはピューリタンにも受け継がれ、彼らは或る意味でブリティン島を一つの再興されたエデンの園に化そうとした。その後、同じ表象は、そっくり植民地アメリカに投影されることになる。

また、イギリスが美術界に対してなした唯一の貢献とされる「風景式庭園」の発明が、庭とイングリッシュネスの結びつきを強めたことも疑いない。しかも風景式庭園は、優れて「テクスチュアル」な現象だった。すなわちそれは、半ば18世紀の文人たちのテキストそのものが生み出した産物なのであり、現に当時、庭はエクリチュールに譬えられもした。例えば、イギリス全土を風景式庭園に変えると豪語した、おそらくイギリスで最も有名な造園家、ケイパビリティ・ブラウンは、庭の或る部分をコンマに、他の部分をピリオド等々に譬えている（後にそれで嘲笑も買うが）。

勿論、こうしたイギリス人の多分にテクスチュアルな庭狂いは、一筋縄ではゆかない多面性をもつ。エデンの園にしてすでに原罪の場という暗黒面を備えていたことからすれば当然なのだが、この展覧会でも、庭への渴望と恐怖、光と闇が交錯するよう展示がなされていたとおもう。しかもイギリス庭園は、政治や経済の動向と表裏一体であった。展覧会では必ずしもこの面は強調されていなかったが、しかしそうした目で見ると、やはり「ジェントルマン資本主義」或いは「ヘリティッジ・インダストリー」の国に似つかわしいお土産コーナーがちゃっかり作ってある。そこでは特別園芸研究チームによって開発された、「大英図書館の知恵の木」なるリンゴの苗も予約販売していた。海外だと送料込みで26ポンドで、今でもネットで買えるそう。小石川植物園にはニュートン・リンゴの末裔があるが、駒場にも一本いかがだろうか。